一日のはじまり

ここから何メートルかの私の世界
ちょっとやそっとじゃ
びくともしない
確固たる私の世界からは

車が通りすぎる
人々が行き来する
隣の家の食器を片付ける音
強い日差し
風がそっと葉を揺らす

秋の澄んだ空気と木でできた床のかたさ

空の色を確かめる
窓の方角や天井の高さ

呼吸する身体
床に触れる身体
ここに根づく私の思考

川とサックスの音

扉を開け一歩外へ出る

雲が重なり合いながら
風が突き抜ける
川沿いの道はまっすぐ進む
照り輝く繁った葉は、
豪快な南風にゆさぶられる

やわらかな光
ゆっくりと動く大気

どこからかきこえてくるサックスの音

河川敷で練習している人がいる

一人で無心になって
美しい旋律を奏でている

その旋律はどこへ向かうのか

流れる川は、そして空は
無言でその音を受け入れたようで
満ち足りた風景がそこには存在していた

闇

静かに目をつぶる
痛みを感じつつ息を
吸っては吐いて
吸っては吐いて
気がつくとあたりは真っ暗だ

だけどかたちは存在していて
自在に姿を変えながらも
次第にあるべきところへ

深い闇、深い沈黙

この闇は悲しみを肯定し
やがてすべてをつつみこむ

「見ること」への意識と
感覚をひらき、内側のかすかな変化を感じ取ること

とおくのほうでは杜鵑が鳴いている

どうやってここまできたのか
なぜここにいるのか
考えても、考えてもわからない

たしかなことは
ただ、一人きり
ということだけ